看護労働に関するアンケート調査

—ベッド-車椅子移動・移乗動作における重労働部分について—

○大久保祐子, 小長谷百絵 (自治医科大学看護短期大学)

小川鑛一, 守安貴彦, 池畑 弘, 小野寺直樹 (東京電機大学)

Questionnaire Survey for Nursing Heavy Duties

— On the hard works for shifting a patient from a bed to a wheel chair —

Yuko Okubo, Momoe Konagaya (Jichi medical School, School of Nursing)

Koichi Ogawa, Takahiko Moriyasu, Hiroshi Ikehata, Naoki Onodera (Tokyo Denki University)

1. はじめに

高齢化社会が進み、健康な老人ばかりでなく日常生活動作においても全介助・半介助を必要とする老人も増えている。その中で、看護・介護力の提供者は筋力の弱い女性であることが多いという現状があり、介護提供者の負担の軽減が求められている。

それらをふまえ、1994年10月に「看護力労働に係わる看護職員・介護職員へのアンケート調査」を実施した。本稿は、ベッド-車椅子間の移乗とそれに関連した動作を中心に、腰痛を引き起こしたことのある動作についての回答と、重労働だと感じている場面・動作について整理した結果について述べる。

2. ベッド-車椅子移動動作で腰痛を起こした場面について

アンケートは、現場看護者500人を対象に行い、357人から回答を得た。回答者の男女構成、年齢構成は図1、2のようである。

図.1 男女構成

図.2 年齢構成

腰痛経験者は75.4%(269人)であった。ベッド-車椅子間の移乗とそれに関連した動作を、図にしたものを示し、その中に腰痛を起こした動作があるか、腰痛を起こした頻度の高い順に3つ選んでもらった。その結果、腰痛経験者のうち79人は、横

から全面介助で抱き起こす際に腰痛になった経験があった。次いで、寝たままの対象者を抱きかかえる動作、ベッド端に座っている対象者を腋の下に手を回し抱きかかえる動作で、腰痛を起こした経験者が51人、45人と多かった。また、ベッド-車椅子間の移動にかかわる動作をグループとしてみると、抱きかかえて車椅子へ移す一連の動作群で、最も腰痛の発生頻度が高かった。

図.3 看護動作場面集 (抜粋)

図.4 腰痛を起こした動作

表.1 看護動作場面集

- A 臥位からベッド上座位への介助 (図3参照)
 B 座位から立位への介助
 ①腰ベルト使用 ②脇の下を抱く ③腰をはさむ
 C 立位から車椅子への介助
 ①腰ベルト使用 ②脇の下を抱く ③腰をはさむ
 D 抱きかかえ移乗
 ①寝たまま持ち上げる ②移動する ③車椅子へ降ろす
 E 車椅子からのずり落ちを直す
 ①後ろから引く ②前から押し上げる
 F 臥位から端座位への介助
 ①回転させながら起こす ②起こしてから足を降ろす ③半分足を降ろして起こす

これは、患者を車椅子へ抱きかかえる動作は、患者の重さが、そのまま介助者の負担になる行為のためと考えられる。その中でも、抱き上げるときが、腰痛発生頻度が高かった。また、全面介助の臥床患者をベッド上座位にする動作で、腰痛を起こしたという回答が最も多かったことは、動作の実施頻度が高いことと、力の向きが介助者にとって不自然で負担の多い方向であったり、予想以上に力が必要だったりするためと考えられる。

3. 重労働と認識している場面について

腰痛経験を問わず、重労働と思う場面を自由記述で回答してもらった。その結果の概要は以下のようである。

A. 行為について

日常生活援助のほとんどの項目が回答にあげられていた。

- 1) 車椅子への移乗、それに付随する抱き起こし
- 2) ストレッチャーへの移動、ストレッチャーでの搬送
- 3) 車椅子からトイレへの移動、トイレでの座りなおし

4) ベッド上での日常生活介助

体位変換、おむつ交換、便器挿入、清拭、洗髪、更衣、シーツ交換、食事介助)

5) ベッド上でのずり落ちを直す

6) 入浴介助

7) 機械・器具の移動・運搬

B. 姿勢

単一の姿勢を続けること、また、動作の頻度の多さに由来する姿勢の変化の反復運動が、あった。

1) 中腰

2) 前傾姿勢

3) 立位-しゃがみ込みの繰り返し

C. 対象の条件

1) 全面介助の必要な人 (寝たきり患者、麻痺患者、介助者につかまれない人)

2) 肥満者、体格のいい人

3) 床にいる患者

D. 介助者の条件

1) 一人で介助する

2) 女性だけで介助する

3) 夜勤のとき、疲れているとき

4. まとめ

看護労働の中には、重労働と思われる場面が全般にわたってあることがわかった。介助者は、多くの場面で、重労働であると自覚しながら、介助を提供していた。さらに、看護労働の中には、機械・器具の移動や運搬等、人以外の対象に対する、重労働も存在している。

一般に病院などの施設では、ベッド生活を送っているが、ディールーム・浴室など、介助者の足下に被介護者がいる環境も少なくなく、そのことを重労働と感じている人もおり、今後の家庭内介護の広まりを考えると、介護者への援助の必要性が示唆された。

病院内で、最も頻繁に行われていると思われる、ベッド-車椅子間の移動の周辺動作については、全面介助で横から抱き起こす際に腰痛を起こす介助者が多く、介助者の面から、力を効率的に使い、腰痛障害を発生させない方法を開発する必要性がある。さらに、意識障害など全面介助患者が多く、必ずしも複数で介助ができるとは限らない環境で筋力の弱い介助者の補助をする器具・機器等の開発の方向性を見いだした。